

2006年の反原子力デーにあたり 一日も早く脱原発に転換するよう求めます

若狭連帯行動ネットワーク

36年前の1970年、美浜1号が発電し、「原子の火」として明るい社会の到来を人々に夢見させるものとして、原子力発電所はスタートしました。この「夢のエネルギー」は、重大事故の危険、「死のゴミ」の後始末、日常的な放射能汚染、労働者被曝など、多くの問題を抱えてのスタートでした。

これらの問題は、36年経った今、解決されたのでしょうか。

1973年4月には、美浜1号で燃料棒折損事故が起きました。貴社は3年半これを隠し続け、その後ほぼ7年間運転休止を余儀なくされました。1979年にはアメリカのT.M.原発で炉心溶融事故が起き、1986年には旧ソ連のチェルノブイリ原発で核暴走事故が起きました。日本でも、1991年2月、「粘りがあるから破断しない」と貴社が豪語した矢先に、美浜2号で蒸気発生器細管のギロチン破断事故が起き、冷却水が噴き出しECCSが作動しました。1998年10月には貴社の使用済燃料やMOX燃料の輸送容器で中性子遮へい材レジンのデータ改ざんが発覚しました。1999年9月、貴社は若狭ネットなど市民グループからの再三の指摘を無視した結果、英BNFLによる高浜原発用MOX燃料ペレットの外径データ改ざん事件を見抜けませんでした。

そして、2004年8月9日、貴社は、美浜3号で復水系配管破断事故を起こしました。噴出する高温蒸気を浴びて下請作業員5名が即死し、6名が重軽傷を負いました。破断した配管の肉厚を運転開始から28年間も測定していなかったにもかかわらず、「減肉していたことは事故が起きるまで知らなかった」と言い訳してきました。しかし、事故の起きる1年以上前に破断部位の点検漏れが発覚しており、その後何度も減肉による破断事故の可能性を知る機会があったし、少なくとも破断1～2週間前には当該部位が次回点検で初回点検であること、つまり、点検漏れであったことを美浜発電所で確認しています。「貴社が減肉を知っていて、故意に次回の定期検査まで修理を先延ばししたのではないか」といふ疑念は、消えることはありません。

さらに、阪神・淡路大震災を機に、原発の耐震性が問題となり、政府は新たな指針を打ち出さざるを得なくなっています。原子力安全・保安院も新指針に基づいて運転中の原発等の耐震性を評価するよう求めています。貴社の原発についても、周辺の活断層の評価が地震調査研究推進本部による評価と食い違っており、これまでの耐震性評価を見直す必要があると私たちは考えています。

貴社が原発等の立地計画予定地点として挙げていた和歌山県の日高、日置川、石川県の珠洲、京都府の久美浜など多くの地域で、貴社は、きっぱりと「NO!」を突きつけられてきたではありませんか。

私たちは、日本の原子力推進の記念日とされる10月26日に、各地で取り組まれてきた反原子力の行動に連帯し、対関電交渉をこれまで毎年取り組んできました。

2006年反原子力デーにあたり、下記の内容を強く求めます。

運転開始から30年以上経過した美浜1号・2号・3号の施設を閉鎖すること。大飯、高浜原発も即刻停止し、耐震性を見直すこと。

プルサーマル計画を中止し、撤回すること。

使用済核燃料中間貯蔵施設の立地計画をやめること。

使用済核燃料を六ヶ所再処理工場に搬出するのをやめ、日本原燃に試験を中止し六ヶ所再処理工場を閉鎖するよう求めること。

敦賀3・4号増設計画を中止するよう日本原電に勧告し、日本原電に派遣している貴社の社員を引き上げること。志賀原発からの買電をやめること。

長期連続運転、昼夜突貫の工事、定検項目の削減などによる定期検査の短縮等を中止すること。オンラインメンテナンス化による定期検査の削減や定期点検間隔の18～24ヶ月化を断念すること。